

名作選集

艶笑遊里篇 上卷

西澤道書舗

名作落語全集

〈第一巻〉

著者承認
検印省略

艶笑遊里篇〈上巻〉

昭和43年 3月25日 印刷

昭和43年 4月 8日 発行

¥ 290

編著者 今村 信雄

発行者 西澤 道夫

印刷者 松沢印刷KK

発行所

西澤道書舗

東京都千代田区神田神保町1-5

落丁・乱丁の際はお取替致します。

名作落語全集

艶笑遊里篇 上卷

今村信雄 編著



西澤道書舗

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

① 艶笑遊里篇

もくじ

明 烏	桂 文 楽	7
春 雨	三笑亭 可 楽	24
身代わり石	桂 文 治	38
たらちね	柳 家 小さん	60
雪 とん	春風亭 柳 橋	78
品川 心中△上▽	古今亭 志ん生	97
品川 心中△下▽	古今亭 志ん生	119
——仕返し——		
つる つる	桂 文 楽	134
さら 屋	柳 屋 小せん	150

清正公酒屋

桂

文治

子別れ△上▽

△初代▽橘家

円蔵

——おこわの女郎買い——

子別れ△中▽

△初代▽橘家

円蔵

子別れ△下▽

△初代▽橘家

円蔵

現代落語家名鑑△落語協会▽

風流小話

。知らないのね

。名残りに

。お妾

。物入り

。数えようで	。各々に分けて	。泥 棒	。さつま芋	。親切心	。小野道風	。後家	。しそこない	。嫁の乳	。夫婦げんか	。ざんげ	。嫁取り譚	。昼の闇
--------	---------	---------	-------	------	-------	-----	--------	------	--------	------	-------	------



明^{あけ}

烏^{がらす}

(桂

文楽)

世の中にくわず嫌いというお方が幾らもございます。食って嫌いというなら仕方もございますが、食べないで嫌いというのは少し困ります。

△「どうも牛^{ぎゅう}は食べられませんヨ。あの足のふらさがついているところを見ると食う気になりませんね」

なぞという。

○「中村さん、いま親類から軍鶏^{しやも}をもらった、ちょうどいま煮えているんだが食いませんかえ」

中「結構ですな、私はね、牛^{ぎゅう}は大嫌いだが軍鶏^{しやも}とくると大好物で、結構です、頂戴いたしましう。じゃ御免^{ごうむ}を蒙^{こうむ}って箸を突っ込みますよ……、ウンこれは旨^{うま}いね」

○「旨^{うま}うございますか」

中「いい味ですね」

○「そうかえ、実はお前さんがふだん嫌いだといってる牛肉なんだよ」

明 烏

中「へー、これが牛ぎゅうなんですかえ、これならすきだ」

それなら早く食べたならよさそうなものです。中にはまた女嫌めいけんいという方がございますが、これもチット解らないようで、男と生まれて女を嫌う方はない、女と生まれて男を嫌う方もございせんように、それがあるから不思議で、手前どものお客さまで、ややともすると俺は女は嫌めいけんいと仰おつしゃる。あるときお宅へ行って見ますと沢山子供衆こどもぐわうがいますから、

芸「旦那さま」

○「何だえ」

芸「お子供衆が沢山おありですが、みな親類のお子さまですか」

○「うちの子だよ」

芸「左様でございますか、沢山にお貰いなすったので」

○「貰ったンじやアありません、みんな俺の子だよ」

芸「あなたのお子さま……と仰おつしゃると、あなたの奥さんの……」

○「そうだ」

芸「へー、あなた何ですな、女は嫌めいけんいだとよく仰おつしゃいましたが……」

○「君の前だがね、女なんぞは見るのもいやだ」

芸「へー左様でございますかね、女は嫌いだというあなたに子供衆が沢山あるのはおかしい話で」

○「女は嫌いだが女房は好きだ」

じゃア同じことですけれども、こういうのが出ますと、お話のタネになります。

父「婆さんや」

妻「ハイ」

父「ちよつと来なよ、アノネほかじゃアないがね、自分の伴せがれのことだが、よその伴せがれは道楽をするが、それがために親も心配するけれども、またうちの伴せがれはチト固かたもすぎますね、堅餅かたもちの焼きざましみたような奴だ、たまには女郎買いの一ツもするとか、芸者買いでもするとかいうようならいいのだが……。といって、まさか親の口から女郎買いをしろともいい出しかねるが、何しろ一日一室ひとむに入つて本ばかり読んでいて、あれでは身体に障るよ、だんだん顔が青くなってくるような気がするよ、あまり家うちにばかりいるとよくないから、いま用をこしらえて使いに出してやったが、どうもアー固いのも困るね。……オイ婆さん噂をすれば影だ、モー帰つて来た。……お帰るかえ」

父「ハイご苦労、何と言ったね」

伴「先様でもよろしく申されまして、四、五日うちに伺うと仰しやいました」

父「そうかえ、ご苦労、どうだえ、お湯にでも入って来たら」

伴「有難うございます、只今ちょっと横町を通って参りましたら、お稲荷様の初午でございまして」

父「そう、今日は、初午だね」

伴「参詣をいたしましたら御町内の方が大勢いらっしゃいまして、赤飯にお煮メを下さいました。幸いお腹がすいておりましたから、赤飯を三人前お代わりをいたしました」

父「オイ冗談いっちゃアいけないよ、恥ずかしいじゃアないか、稲荷様の祭りで御赤飯のお代わりを三人前、よく食べたね、オイ毒だよ」

伴「それからアノ源兵衛さんと太助さんにお目にかかりまして、これから浅草の観音様の後ろに黒助稲荷とか申すお稲荷様があるそうで、そこへお籠りにゆくが付き合わないかと申されますが行って参つてよろしゅうございましょうかしら」

父「ナニ源兵衛に太助が浅草の観音様の後ろの黒助稲荷へお籠りをする、黒助稲荷へお籠り……アアそうか、判りました、阿父さんもよくお籠りに行ったよ、アノ稲荷様は御利益があるね、俺なぞも若い時分には毎日お参りしたものだ、アアそうか行って来なよ」



伴「へエじゃアお籠りこもでございますから、小僧に夜具でも背負しょわせまして連れて参りましょう」
 父「夜具を……心配しなくともいいよ、向こうに立派な寝道具もありますよ、相手は誰だッけ
 ナ、源兵衛に太助かい、ウーン、スルト中継なかづぎをするだろう」
 伴「へエ中継なかづぎと申しますと……」

父「どこかのお茶屋へ行って一ぱい飲んで行くのだ」

伴「アー左様でございますか、私はお酒は大嫌いですから、それは止よしましょう」

父「それがいけないというのだよ、お前は付き合いたいということを知らないから困るよ、一ぱいは飲めるだろう、我慢して飲みな、それから先は嫌だと思ったら飲んだふりをして盥洗はいせえへこぼしてしまえ、ソコデたいがい、ここが終局おつりと思った時分に裏梯子から降りて勘定してしまふのだ」

伴「へエ、私だけ勘定いたしますか」

父「そうじゃアない、三人分するんだよ」

伴「左様でございますか、三人分勘定いたしましたして、後で割

り前をとりますので」

父「割り前なぞを取ってはいけない、アノ人達はね、町内で札つきの悪い連中だ、アノ人達に勘定されて見る後が恐いや、その心算でな、待ちなく、婆さん出かけるといふから派手な着物を出してやんなよ、ウン帯かえ紺献上がよいだろう、羽織かえ、荒い縞のほうがいいだろうな、お金も三十円ばかり出してやんなよ」

伴「イエお賽銭ならここに二十錢ございますから」

父「いけませんよ、二十錢や三十錢ではいけません、アノお稲荷様は着物が悪かったりお錢が少なかったりすると御利益のないお稲荷様だ、お賽銭を沢山もって立派に着飾って行くところだよ」

伴「左様でございますか、では行つて参りますから」

父「アイヨ、ゆっくり行つておいで」

伴「ヘエ行つて参ります」

こちらは太助と源兵衛、

太「オイ大将、行こうじゃアねえか、来やアしねえよ変わり者だから」

源「そうでない来るよ、このあいだ親父にあつたら、うちの伴は誠に固すぎて困るからお稲荷様

のお籠こもりにつれて行つてやつてくれるところいうんだ、どうだえ、粹いきな親父おやじがあるもんじゃアないか、今に来るからお待ちよ」

太「いまに来るといつて来ないじゃアないか」

源「ここに立つていたつて入費がかかるわけじゃアないやね、マアお待ち」

太「あたりまえじゃアないか、往來に立つていて入費を取られてたまるものか」

源「そう尖とんがるものじゃアないよ、待つてくれると頼んで行つたじゃアないか。……ソラごらん、来た／＼」

伴「お待ち遠さまでございます」

源「たいそう遅かつたね」

伴「親父がいいほうの着物を着て行けと申しまして、それがために遅くなりました」

源「驚いたネ、阿父おとうさんは苦勞人だ」

伴「よい塩梅あんばいにお天氣でございます」

源「いい塩梅ですね」

伴「あなた方は中継なかつぎをなさるそうでございますが」

源「恐れ入ったね、どうもご存じでいらっしゃる。そうさね、どこかで一ぱいやりましょう」

伴「へエ、私はお酒は嫌いですが、一ぱいだけ頂戴いたしました。後は何ばいでもみな盃洗はせせんにあけてしまえますから、それにたいがいここが終局かつりと思う時分に、裏梯子を降りまして勘定を三人分いただきますから」

源「そんなことは心配しては困りますよ、勘定は私がするから」

伴「それがいけないのでございます。親父がそう申しました、あなた方は町内で札つきの連中だから、あなた方に勘定されると後が恐いと……」

源「オヤ／＼手放しだよ、オイやりきれねえや、どこかで一ぱいやろう」

これから途中のお茶屋へ参りまして一ぱい傾けまして、時間が早いからというのでブラ／＼歩きで土手八丁から見返り柳、大門おともんを入ると、両側はチリカラタッポの大陽気おおようきでございます。源「若旦那ここだよ、どうだい立派なものでげしょう」

若「へエどうも大層な所でございますね」



源「お宮がこう沢山並んでおりますが、どうですえ」

若「ヘエ、みんな通る方はお籠りこもをなさるのでございますか」

源「それはお籠りこもをなさる方もあるし、ちょっと御参詣なすってすぐにお帰りなさる方もあるの
で」

若「左様でございますか」

源「何を考えているんだよ」

太「変わり者が見えないじゃアないか」

源「おしっこに行ったよ」

太「この間*に先へお茶屋へ行つて狂言をうまく書いて来なよ、だしぬけに行くと露見ろけんするといけ
ねえや」

源「よし心得た、一件ものを逃のがしてはいけねえや」

太「後は大丈夫だ」

源「阿母おつかア今晚は」

内「いらっしゃいまし、どうもしばらくでしたね。お敷物をもつておいで。サアどうぞこちら
へ、ほんとうにあなたはひどいよ、せんだつても今夜ぜひ来るッてあれッきりでしょう、たまに